

八十年来日本の明史研究

山根 幸夫

はじめに

日本における近代的な東洋史学の創始者は白鳥庫吉（一八六五—一九四二）とされている。白鳥は東京大学の史学科学学生として、ドイツから招聘された歴史学者リース(Riess, Ludwig, 1861—1926)に師事し、近代的・科学的な史学研究法を体得した。一八八六年、東京大学を卒業した白鳥は、同時に学習院教授に就任、更に一九〇四年からは、東京大学教授になった。

白鳥の指導の下に出発した日本の東洋史研究は、まず「満鮮」史の研究にとりくんだ。朝鮮、満州は地理的に日本に近く、日本との利害関係も深かったからであろう。日露戦争の勝利の結果、日本は帝政ロシアより大連・旅順、および東清鉄道支線（日本はこれを南満州鉄道と改称）の租借権を譲渡された。満鉄社長に就任した後藤新平（一八五七—一九二九）は、台湾総督府民政局長時代の経験を生かして、満州の歴史・地理等の調査・研究を進める計画をたてた。そこで、東大教授白鳥に研究を委託し、東京の満鉄支社内に満鮮歴史地理調査部を設置し、『満州歴史地理』及び『朝鮮歴史地理』を編纂させた。後藤が豊富な研究資金を提供したので、調査・編集は順調に進行したらしい。

白鳥の下で、満鮮歴史地理調査部の調査研究に従事したのは、箭内 亘^①（一八七五—一九二六、後に東大教授）、松

井等⁽²⁾(一八七七—一九三七、後に国学院大学教授)、稲葉岩吉⁽³⁾(号は君山、一八七六—一九四〇、後に朝鮮史修史官、建国大学教授)、津田左右吉⁽⁴⁾(一八七三—一九六一、後に早稲田大学教授)であった。少々遅れて参加したのが、池内宏⁽⁵⁾(一八七八—一九五二、後に東大教授)、和田清⁽⁶⁾(一八九〇—一九六三、後に東大教授)であった。彼等は日本における中国史研究の基礎を形成し、その中核的存在となった人物であった。恐らく、彼等は白鳥の厳しい薫陶を受けて、日本の東洋史を背負う存在になったのであろう。彼等の半分が、後に東大教授になったことは、その事を証明している。

一

右のうち、和田清は一九一五年東大を卒業し、一九一〇年代の末から、明代の満州・蒙古の研究に取りくみ、『内蒙古諸部落の起源』⁽⁷⁾を始め、多数の著書・論文を発表して、日本における満蒙史研究の第一人者となった。和田と同期に東大を卒業した清水泰次⁽⁹⁾(一八九〇—一九六〇、後に早稲田大学教授、東京文理科大学教授)は、卒業論文に「明末党争の起源」を執筆して以来、明代の政治・社会経済の研究に専念した。清水は日本における明史研究の開拓者となり、一九二〇年代から三〇年代初めにおいては、唯一人の明史専門家であった。この頃、清水は主として社会経済史を研究していたので、一九三四年に創刊された『食貨半月刊』には、屢々清水の論文が訳載された。然し、清水の他には、殆ど明史を専攻する者はいなかったから、松本善海が一九三五年「明代史研究の貧困」(歴史学研究四—五)を発表したのも当然であり、当時の日本の明史研究はすこぶる貧弱なものであった。清水の専著も『江南の経済史的考察』(外務省文化事業部、一九三四)等があるだけであった。⁽¹⁰⁾

和田、清水に少々遅れて登場したのが、京都大学出身の宮崎市定(一九〇一—、後に京大教授)、田村実造(一九〇

四―、後に京大教授）であり、両人は内藤虎次郎（一八六六―一九三四、元朝日新聞記者、京大教授）の門下であった。宮崎は主として政治史、文化史を専攻し、田村は満蒙史、塞外史を研究した。⁽¹¹⁾

二

一九三〇年代の後半になって、東京では中山八郎（一九〇七―、後に大阪市大教授、国士館大学教授）、百瀬弘（一九〇八―七六、後に神戸大学教授）、星 斌夫（一九二一―八九、後に山形大学教授）、藤井 宏（一九一三―、後に北大教授、国士館大学教授）、及び東京文理科大出身の酒井忠夫（一九二一―、後に東京教育大、筑波大教授）等が現われた。中山は塩法、織造、珠池等を研究し、百瀬は主として通貨問題、殊に銀の流通を研究した。⁽¹²⁾ 星は卒業論文に「明初の漕運について」を採り上げて以来、漕運の研究を専攻し、更に交通史や社会福祉の歴史にも研究を拡大した。⁽¹³⁾ 星と東大同期の藤井は、初め塩法を研究し、次いで明清の商業史に研究を拡大した。⁽¹⁴⁾ 但し、藤井には専著はない。酒井は秘密結社や民間信仰、善書の研究等に新しい視野を開いた。⁽¹⁵⁾

京大出身の三田村泰助（一九〇九―一九八九、後に立命館大学教授）は、内藤虎次郎の最後の門下であつたが、明末・清初の満州史の研究に専念した。⁽¹⁷⁾

三

一九四〇年前後に大学を卒業した者に、京都大学の小畑竜雄（一九二六―八七、後に山口大学、立命館大学教授）、島田虔次（一九一七―、後に京大教授）、東大出身の佐久間重男（一九二四―、北海道大学、青山学院大学教授）、西嶋定生（一九一九―、後に東大教授）等が現われた。

小畑は明初の地方統治、郷村統治等の研究をした。島田は専ら思想史、儒教史を研究⁽¹⁸⁾しており、屢々中国哲学科の出身と誤られることがある。日本の敗戦後、間もなく刊行された彼の『中国における近代思维の挫折』（筑摩書房、一九四九）は、王学左派の思想を扱ったものであるが、一躍島田の名声を高めた。これに対して、東大中国哲学科出身の山下竜二（一九二四―）、後に名古屋大学教授）は、島田説を批判し、兩人の間で激しい論戦が展開された⁽¹⁹⁾。

佐久間は商税の研究から始め、陶磁業、製鉄業等の産業史、更に日明関係史等に、研究の分野を拡大した。佐久間には明代史の一冊の概説書もある⁽²⁰⁾。西嶋は卒業論文に「明代における木綿の普及と松江綿布について」というテーマを選び、綿花の栽培、松江府を中心とする木綿工業の発展を研究した⁽²¹⁾。彼の研究成果は殆ど敗戦後に発表されたが、彼の木綿工業の研究は、戦後の東洋史学界に新風を捲き起した。彼の研究方法のモデルになったものは、大塚久雄の『欧州経済史序説』であった。尚、西嶋の明史研究は木綿工業のみで、以後は古代史（秦漢史）の研究に転向することになった。

四

戦後世代として、最初に登場したのは京都大学出身の萩原淳平（一九二〇―）、後に京大教授）、谷 光隆（一九二〇―、後に奈良女子大学教授）、間野潜竜（一九三―八―、後に大阪外国語大教授）、岩見 宏（一九二四―、後に神戸大教授）、東大出身の山根幸夫（一九二―、後に東京女子大教授）及び東京文理大出身の栗林宣夫（一九二―、後に文教大教授）等であった。

萩原は京大で田村の薫陶を受け、専ら明代の蒙古を研究して、その成果を一冊にまとめている⁽²²⁾。谷は初め馬政の研究に取り組み、その結果を専著に⁽²³⁾まとめると共に、科挙・学校制度についても考察を進め、更に近年は水利・河工の

研究に力を注いでいる。間野は仏教、道教など宗教史を研究する⁽²⁴⁾かたわら、監察制度の研究を進めてきたが、業半ばにして長逝した。

岩見⁽²⁵⁾、山根⁽²⁶⁾および栗林⁽²⁷⁾は、ほぼ時を同じくして徭役制度の研究に取り組み、それぞれ研究成果を一冊の專著にまとめている。尚、山根は最近、紳士層の研究に強い関心を示している⁽²⁸⁾。尚、栗林は大学卒業は戦前であったが、積極的に執筆活動を開始し、徭役制度の研究に取りくんだのはこの時期であったから、敢て戦後最初の世代の中に加えた。

敗戦後の明史研究の成果を飾るものとして、和田⁽²⁹⁾清編『明史食貨志訳註』（東洋文庫、一九五七）を挙げねばならぬ。これは執筆者各人がまとめた草稿を、食貨志研究会において数年に亘って検討を加え、その結果を整理・刊行したもので、日本における明代経済史研究の上に大きな礎石を築いたものであった。本書には、巻頭に編者和田清の詳細な解説がある他、分担執筆者は次の通りである。戸口（松本善海）、田制（藤井 宏）、賦役（山根）、漕運・倉庫（星 斌夫）、塩法（藤井）、茶法（佐久間重男）、錢鈔・坑冶他（百瀬 弘）、上供採造・柴炭他（中山八郎）。中国で刊行された李洵『明史食貨志校注』（中華書局、一九八二）もあるが、本書の方がはるかに詳細で、訳註も丁寧である。何よりも索引が完備していることが、便利である。

五

戦後一〇年余を経過して登場したのが、東大出身の田中正俊（一九三二）、後に東大教授）、佐伯有一（一九三三）、後に東大教授）、小山正明（一九二八）、後に千葉大教授）、京大出身の寺田隆信（一九三一）、後に東北大教授）、小野和子（一九三一）、後に三重大教授）東京教育大出身の野口鉄郎（一九三一）、後に筑波大教授）、大久保英子等のグループであった。

田中・佐伯の両人は、前述した西嶋の木綿工業の研究方法に倣って、明末清初の絹織物業を研究した。但し、その研究成果の全容は公表されないまま、⁽³⁰⁾ 両人は明史研究からは退いて、近現代史の研究に転換した。小山は明末・清初の大土地所有の実態を考察して、⁽³¹⁾ 明末・清初期こそ、中国社会における古代奴隸制から農奴制への移行期、換言すれば、明末・清初こそ中国における封建社会の成立期であるという突飛な新説を提示した。日本の学界では、その新奇さに驚かされたものの、小山の新説に賛同する者は殆どいない。

次に、寺田は明代の代表的な商業資本としての山西商人の活動を研究したが、⁽³²⁾ 山西商人は藤井の研究した徽州商人と共に、当時の商業界を二分する代表的な商業資本であった。小野は主として明末の東林派の政治思想を研究している。⁽³⁴⁾ 野口は白蓮教、その他民間信仰の研究に専念している。⁽³⁵⁾ 大久保は陽明学左派の泰州学派の研究から始めて、教育・書院等の研究を進め、大著を刊行したが、⁽³⁶⁾ その後すっかり学界から遠去かってしまった。

六

一九六〇年代後半になって、積極的な活動を開始した者に、京大出身の森 正夫（一九三五―、後に名古屋大教授）、谷口規矩雄（一九三五―、後に大阪大教授）の両人があり、共に賦役制度、農民反乱の研究を展開している。森が最初に発表した論文は、江南官田の研究であったが、最近それらの論文を改稿して、『明代江南土地制度の研究』（同朋舎、一九八九）を出版した。⁽³⁷⁾ 又、森が谷川道雄（一九二五―、後に名古屋大・京大教授）と共編した『中国民衆叛乱史』⁽³⁸⁾（平凡社・東洋文庫、一九七八―八三）の中では、第二巻で阪倉篤秀・檀上 寛が「元末の民衆叛乱」、西村元照が「明代中期の二大叛乱」、第三巻では谷口規矩雄が「李自成・張献忠の乱」、夫馬進が「明末白蓮教の乱」について、それぞれ詳細な解説をすると共に、関係史料の訳註を試みている。明代の農民叛乱を通観する上で、極めて便利な書

である。尚、谷口の賦役制に関する研究に、山東の門銀の成立を論じたものがある⁽³⁹⁾。その他、東京教育大出身の鶴見尚弘（一九三一—、後に横浜国大教授）は、初め明初の里甲制を研究したが、その後は魚鱗図冊や賦役黄冊の文献的研究に専念している。

七

一九七〇年代に入って、活発な研究活動を展開し始めた者に、東京教育大出身の奥崎裕司（一九三五—、後に青山学院大教授）、佐藤文俊（一九三八—、都立大山高校教諭）、東大出身の浜島敦俊（一九三七—、後に大阪大学教授）、川勝 守（一九四〇—、後に九州大学教授）等がいる。

奥崎は東大宗教学科を卒業後、東京教育大の大学院へ進み、酒井忠夫の指導を受けて、宝巻や善書の研究に取り組み、⁽⁴⁰⁾それらが紳士層の思想の中に、どの様に採り入れられているかを考察した。特に、袁了凡一族についての長期間に亘る研究には興味深いものがある。佐藤は早稲田大学から東京教育大の大学院に進み、研究生生活のスタートはやや遅れたが、明末農民反乱の研究に専念し、農民反乱と王府莊田との関連性をも考察している。その成果をまとめた『明末農民反乱の研究』⁽⁴¹⁾に対して、筑波大学より文学博士の学位が授与された。

浜島、川勝の両人は、共に賦役制度、殊に明末・清初の〈均田均役〉制度の研究から出発して、水利問題と村落共同体の関連を追究し、新しい視野を開拓した。両人はそれぞれの研究成果を大冊にまとめている⁽⁴²⁾。尚、浜島は最近社会史の分野にも足を踏みいれ、華々しい活動を進めている。

現在、四〇歳前後で、若手研究者として意欲的な研究を行なっている者に、九州大学出身の和田正広（一九四二―、後に九州国際大助教授）、慶応大学出身の浅井 紀（一九四五―、後に東海大学教授）、中央大学出身の川越泰博（一九四六―、後に中央大学助教授）、北海道大学出身の奥山憲夫（一九四七―、後に国士館大学講師）、京大出身の夫馬進（一九四八―、後に京大助教授）、同じく檀上 寛（一九五〇―、富山大助教授）、森 紀子、関西学院大学出身の阪倉篤秀（一九四九―、後に関西学院大学教授）等がいる。

和田は官制の発達を中心に、紳士層の研究等にも取りこんでいる。川越・奥山の兩人は、共に軍制史の研究を続けてきたが、川越は特に衛所制度、「衛選簿」の分析等⁽⁴³⁾に力を注いでいる。奥山は中央の兵制や軍官の研究に中心を置いている。浅井は白蓮教、その他の民間宗教について研究、その成果に対して慶応大学より文学博士の学位を授与され、近々の中に専著として刊行される予定である。⁽⁴⁴⁾夫馬は都市と社会福祉の分野で、意欲的な研究を発表しており、社会的な研究方法を採り入れている。檀上は最初、明初⁽⁴⁵⁾の政治史を考察していたが、現在では政治思想史的研究に打ちこんでいる。同じく京大出身の森 紀子も、陽明学派、殊に左派の思想史的研究を進めている。阪倉は明初の制度史から出発して、官制史の研究に専念している。

更に、三〇歳半ばの新人には、新宮学（旧姓佐藤、一九五五―、現山形大学助教授）、井上 進（一九五五―、京大助手）等がいる。新宮は東北大学出身で、商税の研究から始めて、現在都市研究に専念している。井上は京大出身で、東林派の政治思想を中心に、思想史的研究が続けている。この世代には、まだ多数の新人がいるが、一々列挙しきれないので、上記の二人に止めた。

九

以上の如き明史研究とは別に、日本では二〇世紀の初めから、日明関係の研究が始まっていた。勿論、それは上述の如き明史研究が開始される以前のことであった。〈倭寇〉の研究としては、一九〇〇年前後から、後藤秀穂（肅堂）、栢原昌三、瀬野馬熊等の研究が多数発表された。⁽⁴⁵⁾

一九二〇年代には、三浦周行（一八七一—一九三一、京大教授）、池内 宏（東大教授）⁽⁴⁶⁾等が、日明関係の研究をも続けた。一九三〇年代に入ると、東京では秋山謙藏（一九〇三—一九七八、女子美術大学教授）、石原道博（一九一〇—、茨城大学教授）、京都では小葉田淳（一九〇五—、京大教授）等が活躍した。小葉田には『中世日支通交貿易史の研究』（刀江書院、一九四一）、石原には『明末清初日本乞師の研究』（富山房、一九四五）等がある。⁽⁴⁸⁾石原は戦後も引続き日明関係の研究に専念している。

戦後における日明関係の研究者としては、田中健夫（一九二三—、後に東大教授）、佐久間重男（前述）等があり、田中には『中世海外交渉史の研究』（東大出版会、一九五九）、『倭寇と勘合貿易』（至文堂、一九六一）等がある。又、入明僧策彦の旅行記『入明記』を研究したものに、牧田諦亮（一九二一—、後に京大教授）の『策彦入明記の研究』（法藏館、一九五五、五九）があり、当時の日明関係を知る上に、貴重な資料である。その他、東大史料編纂所に収蔵されている『倭寇図巻』が、近藤出版社の手によって複製されたことは、学界にとって大きな収穫であった。然し、最近では日明関係や倭寇に関する研究者が殆どいなくなったことは、まことに残念である。

戦後の日本において、明史研究の隆盛をもたらした一因として、台湾の中央研究院歴史語言研究所より影印本『明実録』⁽⁴⁹⁾が刊刻されたことを挙げるべきであろう。実は戦時中にも江蘇国学図書館本が複製されたが、一般の研究者が購入するには、余りにも高価すぎた。処が、中央研究院本は、私達でも多少無理をすれば、購入できない価格ではなかった。それ故、日本の明史研究者の多くは、中央研究院本の明実録を所蔵している。

戦前では、日本国内で『明実録』を架蔵している図書館は、東京に若干あるだけで、京都では、内閣文庫本を写した新しい鈔本が存在するのみであった。明史を研究しようと思っても、『明実録』を披閲することは容易なことではなかった。然し、現在では自分の手元に置いて、必要に応じていつでも披閲できるようになった。これは明史研究者にとって非常に大きな福音である。而も、中央研究院本には、黄彰健教授による厳密な校訂が加えられており、他の如何なる実録よりも便利である。

戦後における日本の明史研究の成果を結集したものととして、株式会社大安より刊刻された『清水泰次博士追悼記念明代史論叢』⁽⁵⁰⁾（一九六二年八月）が挙げられる。本書は当時の主要な明史研究者の論文を網羅したもので、二〇余名が寄稿している。それから三〇年近くたった現在、日本の明史研究者は数倍にふえ、その間に明史に関する多数の著書・論文が刊行された。筆者がアメリカのコロンビア大学の明プロジェクト（グドリッチ教授主宰）に協力して、一九六〇年『明代史研究文献目録』（東洋文庫明代史研究室）を編纂したが、三〇年を経過した現在では、この目録は殆ど役に立たないほど、多数の明史に関する著書や論文が出版された。尚、明年三月に刊行予定の、筆者の退職を記念する『明代史論叢』⁽⁵¹⁾（汲古書院）には七〇余名の寄稿が予定されている由である。本書は日本の明史研究の成果を示す

ものとなろう。

十一

日本における明史研究の発展を示す指標として、雑誌『明代史研究』を挙げることができよう。本誌は一九七四年に筆者の手で創刊したもので、微々たる小冊子に過ぎないけれども、日本の明史研究の発展に一定の寄与をなしたのではないかと自負している。隔週に東洋文庫で開催される研究会には、特定の大学に限らず、多数の大学から院生クラスの若い研究者も集まってくるし、時には日本に留学した外国人研究者も参加している。例えば、英人E・ウィルキンソン（元ロンドン大学助教、現在はE・C・の外交官）、呉金成（現在ソウル大学教授）、王賢徳（現在高雄師範大学教授）等の諸氏は、比較的長期間に亘って、明代史研究会に参加した。

日本では、明史に比べて清史（アヘン戦争以前）の研究はすこぶる貧弱である。何故、日本では清史研究者が少いのであろうか。但し、満州史の延長線上にある清初史研究は、神田信夫（一九二一―、明治大学教授）、松村 潤（一九二四―、日本大学教授）等を中心として、活発な研究活動が続けている。

社会経済史を研究する場合には、明末・清初を一括して考察の対象とする場合が多い。これは新中国における資本主義萌芽論⁽⁵²⁾とも関係があるであろう。事実、社会経済の問題を扱う場合には、政治的分期によって区別することは困難であり、明末・清初を一つの時期として扱う方が好都合である。明末・清初を一括して考察する方法は、戦後の明史研究の一つの産物と言えよう。

おわりに

以上、八〇年来の日本における明史研究の成果を概括してみたが、矢張り明史研究が長足の進歩をとげたのは戦後のことであつた。それでは、明史研究を刺激した原因は、何であつたのであろうか。明史といつても、特に社会経済史の研究が多数であつたが、その場合屢々地方志が利用された。私自身も卒業論文の作成に当つて、明実録と併せて、大いに地方志を活用した。東京の図書館には、豊富な地方志のコレクションを有するものが多い。私達は地方志の中から屢々具体的な、詳細な記述を発見することができた。

最初、社会経済史の多かつた明史研究も、徐々にそれ以外の分野への研究を拡大していった。即ち、政治史、思想史は素より、世界的に活発になつてきた「社会史」の分野等にも、新しい研究が生れている。又、中国哲学、中国文学の側からも、歴史と結合して研究を推進しようとする若手研究者も出てきている。この風潮を促進したのが、東大中国学会である。⁽⁵³⁾

最後に、従来の明史研究は専ら文献に依存して進められてきた。然し、最近中国では各種の古文書に基づいて研究する傾向が顕著になつてきた。所謂「徽州文書」の如きは、代表的な文書であり、その中には明・清期の文書も多数含まれている。然し、私達外国人研究者にとっては、それらの古文書が活字になるまで待つしかなく、些か残念な事と言わねばならぬ。

註

(1) 箭内 亘は一九〇一年、東大史学科卒。初め満鮮歴史地理調査部で白鳥の薫陶を受け、一九一〇年、一高教授、一九一九

年、東大助教授、一九二五年、教授となったが、翌年二六年二月、急逝した。

- (2) 松井 等は陸軍中将・男爵大藏平三の長男として生れ、一九〇一年、東大史学科卒。日露戦争に際して、陸軍少尉として従軍、翌年中尉に陞ったが、この戦争体験が彼の人生観を大きく変えたいらしい。エリート・コースを歩むことができたにも拘わらず、不遇な歳月をすごし、彼が国学院大学教授になったのは、一九二〇年のことである。その著『東洋史概説』(共立社、一九三〇)は高い評価を受けた。

- (3) 稲葉吉は一ツ橋の外国語学校で中国語を修め、中国に渡り、日露戦争の際には、通訳として従軍した。後、内藤湖南に師事して清朝史、満州史に興味を抱き、一九〇九年、満鮮歴史地理調査部員となり、一九二五年には朝鮮史修史官、三七年には建国大学教授に就任した。軍部との関係は密接であつたらしい。

- (4) 津田左右吉は一八九一年、東京専門学校政治科を卒業、一九〇八年、満鮮歴史地理調査部員となり、白鳥の薫陶を受けて、歴史の研究法を会得した。一九一八年、早稲田大学教授となり、中国および日本の古代思想史を講じた。

- (5) 池内 宏は一九〇四年、東大史学科卒。初め満鮮歴史地理調査部において、満州・朝鮮の歴史を研究、これが彼の生涯の専攻となった。一九一三年、東大講師、一六年、助教授、一九二八年、教授となった。

- (6) 和田 清は一九一五年、東大史学科卒。一九二三年、東大講師、一九二七年、助教授、一九三三年、教授。一九五一年、東大を定年退職。財団法人東洋文庫の理事、研究部長として長く活躍。

- (7) 服部奉公会、一九一七年六月刊。本書は卒業論文に多少手を加えたもので、和田の若冠二七歳の処女作であつた。

- (8) 和田には『東亜史研究・満州篇』『東亜史研究・蒙古篇』(共に東洋文庫)の他に、『東亜史論叢』(生活社、一九四二)、『中国史概説』上・下(岩波全書、一九五〇—五一)等の著書がある。

- (9) 清水泰次は一九一一年、早稲田大学史学科を卒業した後、更に東大に進んで東洋史を専攻、東大卒業後は早大講師となり、更に教授となり、戦後東京文理科大学教授になった。その間、長年に亘って東京女子大講師を勤めた。女子大追分寮の敷地の一部を寄付された由である。

- (10) 戦前、清水には『明代の皇室及び官史』(東亜研究会講座三九輯、一九三二)もあつた。戦後、明代の賦役史を概観した『中国近世社会経済史』(西野書店、一九五〇)があり、その死後、山根が整理・編集した『明代土地制度史研究』(大安、一九六八)もある。

- (11) 田村には編著『明代満蒙史研究』（京大文学部、一九六三）の他に、『中国征服王朝の研究』上・中・下（東洋史研究会、一九六四、六六）、『慶陵』（京大文学部、一九五三）等がある。
- (12) 百瀬の銀に関する論文等を、中村哲夫、山根が整理・編集し、解説を加えたものに、『明清社会経済史研究』（研文出版、一九八〇）がある。
- (13) 星には漕運に関する研究として、『清史稿漕運志訳註』（極東書店、一九六二）、『明代漕運の研究』（日本学術振興会、一九六三）、『大運河—中国の漕運』（近藤出版社）、『大運河発展史』（平凡社・東洋文庫、一九八二）がある他、『明清時代交通史の研究』（山川出版社、一九七二）、『中国の社会福祉の歴史』（山川出版社、一九八八）、『明清時代社会経済史の研究』（国書刊行会、一九八九）等の著書がある。最後のものは、死後に刊行された。
- (14) 藤井の商業史に関する研究として、『新安商人の研究』（東洋学報三六—一四、一九五三—五四）がある。新安は徽州の古名である。
- (15) 酒井には『中国善書の研究』（弘文堂、一九六〇）があり、「善書」に関する詳細な考察を加えると共に、功過格、陰陽文、宝卷等についても論及しており、この方面の研究に新境地を開いたものである。
- (16) 恩師内藤湖南の人と学問を論じた、三田村の著書『内藤湖南』（中公新書、一九七二）がある。
- (17) 三田村には『清朝前史の研究』（東洋史研究会、一九六五）があり、明末・清初の満州について考察した諸論文を収めている。
- (18) 島田には宋・明の儒学を論じた『朱子学と陽明学』（岩波新書、一九六七）がある。朱子学と陸象山の思想的対立を論じ、陽明学を陸学の継承とする通説を排し、朱子学から陽明学への継承を説く。
- (19) 島田説批判、及びその反批判として、次の諸篇がある。山下竜二「近世と近代—王学左派の評価をめぐる」（東京支那学会報一二、一九五三）、島田「王学左派論批判の批判」（史学雑誌六一—九、一九五二）、山下竜二「島田氏の批判を読んで」（史学雑誌六一—二二、一九五二）。
- (20) 佐久間重男『中国近世史—明代史』（法政大学通信教育部、一九五七）。本書は明史の概説として頗る要を得たものであるが、市販されていないのは残念である。
- (21) 西嶋の木綿工業に関する論稿には、「松江府に於ける棉業形成の過程に就いて」（社会経済史学一三—一一・一二、一九四

四)を始め、戦後に発表された「支那初期綿業市場の考察」(東洋学報三一―二、一九四七)、「支那初期綿業の成立とその構造」(オリエンタリカ二、一九四九)、「一六・一七世紀を中心とする中国農村工業の考察」(歴史学研究一三九、一九四九)等がある。後にこれらの諸篇は『中国経済史研究』(東大出版会、一九六六)に再録されている。

(22) 萩原淳平『明代蒙古史研究』(同朋舎、一九八一)。本書は萩原の学位論文である。

(23) 谷 光隆『明代馬政の研究』(東洋史研究会、一九七二)。本書も谷の学位論文である。

(24) 間野の諸論文をまとめたものが、『明代文化史研究』(同朋舎、一九七九)であり、本書も間野の学位論文である。

(25) 岩見 宏『明代徭役制度の研究』(同朋舎、一九八六)は、岩見の学位論文であるが、刊行までに一〇余年を経過している。

(26) 山根『明代徭役制度の展開』(東京女子大学学会、一八六六)。

(27) 栗林宣夫『里甲制の研究』(文理書院、一九七二)。本書は題名は里甲制の研究となっているが、内容的には明代の徭役制度全体を扱ったものである。

(28) 山根『明代社会の研究―紳士層の問題を中心として』(文部省科研費報告書、一九八六)。

(29) 食貨志研究会は戦時中、満鉄の助成金を受けて、加藤 繁、和田 清両教授の指導の下に活動を開始した。戦後は、和田の指導の下に、東大東洋史研究室で再開され、歴代食貨志の会読をつづけた。但し、その成果が刊行されているのは、『明代食貨志訳註』を除くと、『宋史食貨志訳註』第一冊(東洋文庫)があるのみである。

(30) 田中、佐伯の両人は、卒業論文製作で共同研究を試み、田中は農村の絹織業、佐伯は都市の絹織業を分担した。その概容を示したものとして、田中・佐伯「一六・七世紀中国の蚕糸絹織業」(東洋経済新報社『世界史講座』一、一九五五)がある。

(31) 小山正明「明末清初の大土地所有―特に江南デルタ地帯を中心にして」(史学雑誌六六―一二、六七―一、一九五七―五八)。小山の見解が成立した背景には、日本史の安良城盛昭の太閤検地論があり、安良城はこの時期に日本の封建制が確立したと主張した。小山説を反論したものに、安野省三「明末清初揚子江中流域の大土地所有に関する一考察―湖北省漢川県蕭堯案の場合を中心として」(東洋学報四四―三、一九六二)があり、当時の地主佃戸関係から見て、小山の主張するが如く、明末清初を封建制成立期とは見做し難いことを主張する。

(32) 寺田『山西商人の研究―明代における商人および商業資本』(東洋史研究会、一九七二)。本書は寺田の学位論文である。

寺田は山西商人の資本は、ただ商品取引資本としてのみでなく、高利貸資本としても機能したことを指摘している。

(33) 註(14) 参照。

(34) 小野には「東林派とその政治思想」(東方学報二八、一九五八)を始め、「東林党考」(東方学報五二、五五、一九八〇、八三)、「東林党と張居正」(『明清時代の政治と社会』京大人文科学研究所、一九八三)等、多数の論稿があるが、まだ一冊にはまとめられていない。尚、小野は中国女性史の研究で、文学博士を授与されている。

(35) 野口には『明代白蓮教史の研究』(雄山閣、一九八六)があり、本書は野口の学位論文である。尚、本書には巻末に「清末江西の秘密宗教と近代への傾斜」が付録されている。

(36) 大久保は東京女子大学(専門学校)で、清水泰次の指導を受け、更に東京文理科大学へ進学した。その著『明清時代書院の研究』(国書刊行会、一九七六)は、書院を政治・社会・経済との関連で考察している。

(37) 本書は、著書が既発表論文を基に、大幅に改訂して再編成したもので、第一章「一四世紀後半における明代江南官田の形成」、第二章「明初江南官田の存在形態」、第三章「一五世紀前半における江南官田の再編成」第四章「一五世紀中葉以降の江南デルタにおける税糧徴収制度の変容」、第五章「一六世紀江南における税糧徴収制度の改革と官田の消滅」という構成になっている。非常に壮大な研究である。

(38) 『中国民衆叛乱史』は全四巻、第一巻は秦—唐、第二巻は宋—明中期、第三巻、明末—清(一)、第四巻、明末—清(二)、となっており、重要な民衆叛乱の史料に訳註を加えると共に、詳細な解説を施している。

(39) 谷口「明代華北における銀差成立の一研究—山東の門銀成立を中心として」(『東洋史研究』二四—三、一九六五)。谷口には『洪武帝』(人物往来社・中国人物叢書)もある。

(40) 奥崎『中国郷紳地主の研究』(汲古書院、一九七八)は、思想的な立場から考察したものであるが、袁了凡一族について長い世代に亘って、具体的な考察を加えている。

(41) 佐藤『明末農民反乱の研究』(研文出版、一九八六)は、著者が書きためた論文を一冊にまとめたもので、王府の問題についても論及している。

(42) 川勝『中国封建国家の支配構造』(東大出版会、一九八〇)、浜島『明代江南農村社会の研究』(東大出版会、一九八二)。

(43) 川越の「衛選簿」を扱った論文として、「明代女直軍官考序説」(『史苑』三八—一・二、一九七八)、「明代衛所官の都司職任

用について」(中央大学文学部紀要九二、一九七八)、「明代衛所官の世襲状況について」(『多賀秋五郎博士頌寿記念アジアの教育と社会』一九八三)等がある。

(44) 浅井の著書は、研文出版より一九八九年中に刊行予定。

(45) 後藤秀穂(肅堂)の倭寇、及び日明関係に関する論文は、一九一〇年代から二〇年代にかけて頗る多く、主として『史学雑誌』『歴史地理』に発表されている。柏原昌三には主として日明勘合貿易を扱った論文が多い。

(46) 池内には『文禄慶長の役』正篇(東洋文庫、一九一四)、同別篇(東洋文庫、一九三六)の大著がある。

(47) 秋山には『日支交渉史研究』(岩波書店、一九二五)がある。

(48) 石原は戦前・戦後を通じ、一貫して日中交渉史を探究した。その著書には上記の他に、『倭寇』(吉川弘文館、一九六四)、『朱舜水』(吉川弘文館、一九六一)、『国姓爺』(吉川弘文館、一九七二)等の諸書がある。

(49) 『明実録』について、日本人が論じたものに、三田村泰助「明実録の伝本に就いて」(東洋史研究八一、一九四三)、浅野忠允「明実録雑考―影印本を中心として」(北亜細亜学報三、一九四四)、間野潜竜「皇明実録私考」(『神田博士還暦記念書誌学論集』一九五七)、同「明実録の研究」(『明代滿蒙史研究』所収、後に間野『明代文化史研究』に再録)等の諸篇がある。

(50) 本書は清水博士の退休頌寿記念の論文集として企画したものであったが、博士が余りにも早く逝かれたので、追悼記念論集となってしまった。本書の編者は酒井忠夫、中山八郎、星 斌夫および山根の四人である。

(51) 本書には、日本の明史専門家のみでなく、海外の学者の寄稿も予定されている。一九六二年に清水博士追悼記念『明代史論叢』の刊行を担当された株式会社大安の坂本健彦氏が、今回は汲古書院社長として、出版を引き受けて下さった。不思議な因縁と言うべきであろう。

(52) 中国における資本主義萌芽論争に関する諸論文を集めて、編纂したものに、中国人民大学中国史教研室編『中国資本主義萌芽問題討論集』上・下(三聯書店、一九五七)、南開大学歴史系教研室編『中国資本主義萌芽問題討論集統編』(三聯書店、一九六〇)、南京大学歴史系明清史研究室編『明清資本主義萌芽研究論文集』(上海人民出版社、一九八一)、同『中国資本主義萌芽問題論文集』(江蘇人民出版社、一九八三)等の編著がある。

(53) 東大中国学会は、中国哲学、中国文学の研究者を中心に設立されたが、その後中国史の研究者も加入し、総合的な中国学

会に発展している。機関誌は『中国—社会と文化』で、年一回刊行されている。

付記 本稿は一九八九年八月一日—三日、台湾大学主催で開かれた「民国以来国史研究的回顧与展望研讨会」に出席した際に、報告した論文に若干筆を加えたものである。